

月例研究会 (2013年7月24日)

宗教と社会運動のあいだ

—1930～50年代における妹尾義郎の思想と運動—

大谷 栄一

1. 問うべき課題

本報告の目的は、近現代日本における宗教者の社会活動に関する研究の一環として、仏教社会運動家・妹尾義郎(1889～1961)の思想と運動の特徴とパターンを析出することである。先行研究の成果を踏まえ、妹尾の運動の全体像を再構成することが必要であり、とくに地域社会における活動、社会運動との関連、グローバルな「思想連鎖」(山室信一)について検討することが重要な課題となる。

2. 新興仏教青年同盟時代(1931～1945)

1931年に新興仏教青年同盟を結成した妹尾は、「仏陀のみ名による全宗派仏教の解消とその統一、および資本主義の共同社会的改造」を意味する「新興仏教」を提唱した。運動の目的は、仏教界の改革と資本主義体制の変革を通じて、仏教の真理を現代的に闡明化して実践し、仏国土を建設することだった。その勢力は14県18支部、同盟員146名、誌友524名を数え(内務省警保局資料)、各地でさまざまな活動が実践された。

仏教界との関係を見ると、全日本仏教青年連盟を激しく批判し、除名された。また、仏教界を批判した反宗教運動とも対立しながら、自分たちの立場性を築き上げた。

一方、体制変革のための活動に着目すると、1933年以降、『労働雑誌』の編集発行人就任、労農無産協議会への個人加盟、東京都府会議員選挙への立候補(結果は落選)など、妹尾個人は無産運動への関わりを強める。そうした妹尾の活動に対して、仏教界の改革を求める同盟員たちは反発し、運動は停滞する。1936年12月

以降、妹尾と同盟員たちは検挙され、治安維持法の適用によって組織は解体した。

3. 戦後の仏教改革運動と平和運動の時代(1945～1951)

戦後の妹尾は、仏教社会主義同盟(のちに仏教社会同盟, 1946年)、全国仏教革新連盟(1949年)、日本平和推進国民会議(1951年)の創立に関わり、仏教改革運動と平和運動に取り組んだ。

この時期の妹尾らの仏教改革運動は、平和運動と結びついていた。その前提には、アジアに対する日本仏教界の「懺悔」がある。また、1930年代の新興仏教の理念、活動、運動方針、人的基盤を継承していた。さらには社会党を中心とする戦後革新勢力との連携の中で、社会の変革を訴求し、実践したことも指摘できる。

ただし、以上のような活動には教団改革運動の挫折、理想とする「仏教」理念の不明確さ、特定政党との結びつきへの仏教界の忌避、大衆的な支持基盤の欠如等の欠点もあった。

4. 結論

戦前期における妹尾の新興仏教思想は、国内の近代仏教思想の基調だったナショナリズム、帝国主義、植民地主義に対して、国際主義、平和主義を対置するものであった。新興仏教思想にもとづく新たな社会倫理の提示が、妹尾の思想の重要な特徴である。

また、戦前から戦後を通じて、左翼勢力(政党や労働団体、平和運動団体)とのネットワークにもとづく社会運動への参加も顕著だった。しかし、妹尾たちの運動は大衆性を欠いていた。仏教界からは特定政党との関わりやその政治的イデオロギーが忌避された。

なお、妹尾の思想と運動は、19世紀半ば以降にアジア諸地域で生じた仏教改革運動の一類型として位置づけることができ、妹尾研究は近代仏教のトランスナショナル・ヒストリー研究に接続しうる。思想連鎖の視点から、アジア全域の宗教者たちの社会参加を根拠づけた宗教思想の比較分析を展望できるのではないか。

(おおたに・えいいち 佛教大学社会学部准教授)